

大西莊六先生のこと

二十七回生 林 裕三

千里山にあった唯一の中学である吹田第一中学（後一中）の理科の先生であった大西先生の思い出を語りたい。先生と言ったが男子生徒の中で「先生」と読んでやつは少ないのではないか。われわれの時代は皆「オオニッサン」と読んでいた。家でもそう呼んでいたのか「先生に対して失礼だ」と親父に叱られた記憶がある。現在でも友に聞くと「先生というより兄貴分的な存在であった」と思い出を語る。その「オオニッサン」との出会いはいわれわれが一中に入學した昭和三年四月の始業式の時全校生徒の前で挨拶された。この挨拶の大きな声と早口に、皆と肝を抜かれた。そう「オオニッサン」は大学を卒業されて赴任されたところであった。先生は今でも「あんたらと同期なんや」とおっしゃる。われわれと調度十歳違うのであるが、今でも頭の毛は真っ黒、われわれの方が年寄りにも見えるくらいである。あの元氣な秘密はなんだろうか。学生の

ころは奉法をやっておられ、われわれ生徒に使うことはなかったと思つたが、この間同期生の元氣な良いやつに会つたらよく股間を蹴られたと言ふことであつたから、人を見て使つておられたかもしれない。先生は豊津の駅近くに住んでおられ、今ジャスコがある旧校舎の一中まで毎日歩いて通勤されていたと言ふ。今は豊津中学があるがそのころはなかつたか出来たところであつたので近くの生徒たちが誘ひに来たので、生徒たちと毎日一緒に徒歩通勤をされていたと言ふ。約4kmの距離である。私の感覚では先生と一緒に学校へ行くと言ふのは気が進まないと思ふのであるが、やはり大西先生は生徒たちに親しまれたのか生徒たちと一緒に通われたのである。このこともあつて、体力が人並み以上に丈夫になられたと思ふのである。

昭和三年と言ふのは就職難の年で民間はほとんど採用がなく、学生たちは公務員を目指した年であつた。中でも教職員は相当な競争率であつたと言ふから、失礼ながら大西先生も大した先生であつたのだ。

先生の理科の授業は始めに話す内容全てを黒板に細かく丁寧に書かれ（今思えばこのノートがあればもっと理科好きになつていたかもしれない）背広の前

辺りは白墨だらけであった。中でも前のバンド通しに左親指を入れられたまま、書かれたり、生徒が写し終わるのを待っておられた。生徒が写し終わるころ見計らって早口でお話しになる。それもご承知のように大きな声で隣の教室から文句が出てくるほどであった。

背広と言えは思い出すのはいつも青っぽい色で汚れるのを避けるためかズボンの裾はいつも折り曲げてあった。WOOLの文字がいつも見えていたから今思えば上物である。そのことを後年確認すると府立大学から府の職員になると当時の赤間文三知事が贈呈してくれたとのことであった。そう、先生は府立大学の工学部化学科を卒業され、府の教職員に採用され吹田一中に赴任されたのである。大学の同期生で作家の藤本義一氏と友達であることが先生の自慢とのお話を私の同期生が教えてくれた。お二人の性格があまりにも違うようなので、どんなことをお話になるだろうと興味がある。

理科の先生で書かなければいけないことがある。インターネットで「千里山」を検索し、「千里山ホームページ」なるものが出て来て、「バーチャル千里山」のサイトに「吹田一中」が出て、その項のトップに大

西先生のことが出て来る。吹田一中で何故大西先生が分らないが勝手であるが引用させて頂く。

「昔、大西先生という理科の先生がいた。水素の発生実験をすると、小型のポリタンクに電極付ゴム栓をしたものに溜め、理科室の真ん中に置いて、ひとしきり講釈をした後、スイッチを入れた。ポリタンクが天井まで吹っ飛ぶのを、我々は呆然と見ていた。自分の教室で他の教科の授業中、理科室の方からドカンという音が響くと、皆『また大西先生がやっとなる』と笑った。理科室の教卓の周囲にあるガスの元栓を、ホースも何もつながらずまま、いきなり開いて火をつけた。4つのガス栓がゴーゴーと火炎噴射するのをバックに、ガスの安全利用について説いた。理科室裏で鶏を絞めて首をはね、血を搾り出して見せた。声が大きく、どっから見ても、河内のオッサンにしか見えなかった。」

先生にお聞きすると、われわれがお世話になった旧校舎ではその実験はあまりされていなく、鉄筋コンクリートの新校舎に移転後、安全教育のために良くされたとのことである。それも生徒にせがまれて・・・卒業時間ぎりぎりにも実験された。このサイトには大西先生他一名しか掲載されていない。如何に先生が人気者

であったかご理解いただけたらと思う。他にもこのような書き込みがある。

「中3の時の担任は大西先生でHPにもありましたように、水素と酸素の混合気体を爆発させることは有る名でした。」

「私は、中学生の頃、ちよいと髪が長かった（今言うロングとはちと違う）のですが、しよつちゆう大西先生に捕まって、髪を引っ張られながら、二階の職員室前の廊下を連行されていました。」

ずっと後になって、大西先生の語録をつなぎ合わせて考えてみるに、当時、大西先生にとつて、男の長髪は、金持ちのボンボンの象徴であったようです。今はもちろん、一九七〇年代はじめの当時も、無論ソナナコトハナイのですが、大西先生の世界観の中では、頑としてそうでした。ワシは貧乏人の子がつまらん思いをするのが嫌なんじゃ、と自慢の角刈頭をさすりながら、短い説教の後、釈放してくれました。」

「みなさん、ご記憶の大西先生は、数十年間、まったくお変わりなく、過去からソノママ、タイムスリップして来た、と思われるほどの、お姿、とお声のままです。」

「目に浮かぶようです。変わってはイケナイ、否、変わるなど想像もつかない。」

などの書き込みが続く。

私の同期の友人も授業の思い出を綴って来た。

「理科の授業の一例を挙げると、「磁力」の章ではN極とS極を男女に例えて「好き！好き！」とNとSは引っ付きまんねん」「NとN、SとSはいやよ！いやよ！」と逃げよまんねん」と男女の感情で表現し、分かりやすく教えます。その身振り口角泡を飛ばす熱弁は隣の教室に迷惑するほど大きいと言うよりも、かい声で、私たちは抱腹絶倒しながら授業を楽しんだものですが、今思えば真面目な女子生徒からは響きを買っていたかもしれませぬ。」

この先生のフレイズそのものは忘れていたが、言いそうなことであると笑えて来る。しかし、このフレイズに洗脳されてか私の脳に刷り込まれたか、私は学校を出てから電磁石の設計製造に携わって、今でも金属部品の加工ラインにおけるピクエンドブレイスの電磁ホルダの設計で第二の人生を過ごしている。大西先生のお陰で今の私があるのだと、今更ながら思えてきた。

私は一中ではお寺や観光地を巡る社会見学部の他に山行やキャンプをする登山部に入っていて、大西先生と一緒したが余り目立った存在ではなかった。もちろん一番若い先生であったこともあるがそのことを後年聞くと「山やキャンプに行くには準備と片付けが要る皆わしがやった。旅行するにも点呼したり忘れ物がないかの確認は皆わしや」そう先生は見えないところで活躍されていて私たちの活動を支えて下さっていたのである。

先にも書いたが一番若い先生であったので宿直を頼まれることが多かったのか宿直をされていたときに蝙蝠を捕まえられ私に呼び出しがあった。何を見せられるのか学校に着くと気持ちが悪いいものを見せられた。そう蝙蝠を見たのは初めてで赤い口で鼠のような顔をしていたことと蝙蝠傘とよく言ったものであの羽？と骨組は傘とそっくりであったことと、さすが理科の先生だけはあると感心して帰ったことを覚えてる。私には夜の食事の誘いはなかったが、宿直に関しては有名な話で先の友人の記述にもある。

「当時の先生を語るエピソードとして忘れられないことは、いつも学校を我が家のように宿直されていたこ

とです。そして時々たぶん先生の食料のご都合だと思

うのですが『今晚来てもええで』と何人かの生徒に声がかかります。家から何がしかの食料を持ち出します。ストープの上に飯盒を置いて、ご飯を炊き、スルメを焼いて細かく割り、醤油をつけたものをおかずにします。これが大西流定食で仲間と集いワイワイやれば何よりのご馳走でした。こうした『夜の教室』で先生は私たちから、それぞれの個性を見つけ、生徒間の情報を得ておられたと思うのです。心配な生徒がいると『次の機会につれて来い』と必ず仲間はずれにならないよう声をかけるよう指示されました。お陰で卒業までいじめとか暴力といった問題は耳にしたことがありません。先生の独断とはいえ宿直室に生徒を集め自由にさせるなど、教師生命を脅かすような行為だと思えますが、大西先生の教師としてのポリシーを貫かれたかもしれません。後年先生にお会いする度に当時のことが話題になりますが『今の時代にこんな教師と生徒のことを知られたら大事だろうな』と笑い飛ばされていますが、案外先生自身は上の方からお叱りを受けておられたかも知れません。教師生活の大部分を一中で教鞭をとり、後に豊津中学とは言え一ポジションを貫き通

され教師生活を終えられたのは案外その破天荒な先生振りが影響したのではないかと考えたりします。」

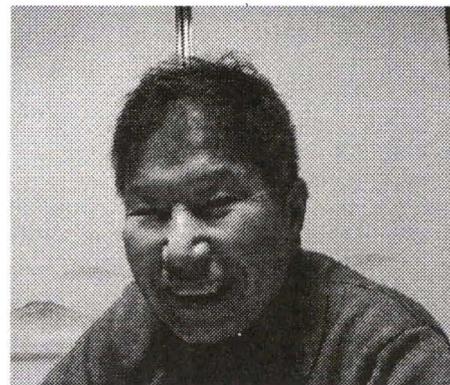
私は、先生は一中が好きで一中の生徒が好きで連続して生徒が入ってくるので途中で逃げるわけにはいかなかったのではなかったのかと思っている。「お前は世話のかからん生徒や」と言われたことがある。特徴のない成績も良くもなくおとなしい子であったのだろう。やんちゃの子はけんかなどしてそれ故先生には他校からの呼び出し、警察からの呼び出しも有ったのではないか。先の宿直室での食事は先生が意識されていたかどうか知らないがことさら指導と言わずに生徒を導いてくれたと思っている。大西先生に逆らった反抗期の生徒には「クラス委員長に立候補せよ」と勧めて我慢することを教えたり、生徒に合った指導をしておられた。何も在校生だけでなく卒業後も世話をやき、勉強嫌いの卒業生には「手に技術を持って」と自ら訓練学校を勧められたり、自分だけではいかんと思ったときは、同期の生徒を呼んで一緒に酒を飲ませたり、色んな手をお使いになっていたのだ。これらことから自分のことよりも人の更生に尽力されたのではないかと推察する。これらのことから五〇歳にな

って保護司になられた。何で保護司をされたのかと聞くに「順番や、町会長、自治会長、教師なんてやっていたらプリントしたり字書くの得意と思われて頼みに来るんや。その延長が保護司や。長いこと住んでいると断れへん。」

先生は自分のことを美化したり飾ったりされない。服装も飾られない。いつも自転車でお出かけになる。保護司でご苦労があったと思うがお話しにならない。無報酬の公務員と世間では言われているが、ご家族も含めて相当な精神力がないと出来ないと思う。

そのご苦労がゆえに昨年(平成二〇年)の秋の叙勲で藍綬褒章を受章された。私たちにとても誉れである。実におめでたいことである。卒業生たちはホテルでの祝賀パーティーを企画したが、「そんな晴れがましいとは行かない」と拒絶され、幹事役は卒業生の代表と先生の間にあって大変だったとのこと。結局、近くの小さな居酒屋で行ったとのこと、しかもお祝い記念品は普段着るジャージを嘱望されたとのこと、なんとも先生らしい話である。しかし受章のため陛下に拝謁されたときの情景はよほど嬉しかったのか、そのとき詳細に卒業生たちに説明されたとのことである。

冗談かホントか知らないが 先生は「名前の庄六とは屋敷が六つあったからだ」とおっしゃっていたが、うちでの節約に対する嫉は厳しく 昔の良家はそうだったであろう。先生の「自宅を辞去するとき 先生の手入れされた枝垂れ梅が美しかった。なんでも自分でおやりになる 本来の梅の美しさを出すように 生徒も 植木もものも大事にされる そう言うことを 梅を見ながら思った。先生何時までも お元気で。



大西先生の最近のお姿 (09年2月撮影)



先生が授与された藍綬褒章